

てゆかれ（七二・七四二頁）、これを師弟共々の後生の安心として、いよいよ現世における忍難弘教・淨仏国土の実践に奮勵されたものと推測される。

引用遺文は『昭和定本日蓮聖人遺文』により、（ ）内はその頁数を示す。

教相事実

——「十如是考」に関することなど——

世 羅 治 夫

物や心に対する九つの視点、相・性などの九如是と、本末・究竟・等という暗号みたいな単語を束ねた一如是とによって構成される十如是卅四字は、偈でも呪でもなく、又、地文とも見えない。法華信者は朝夕の読経でこだけ特に三回読むから、その存在を知らぬ者はいない。ところが殆どの人がその意味が判らず、私もその一人だが、尤もらしい解釈を種々見聞するが要領を得ない。「謎の卅四字」と云った方が一番判り易いくらいである。

ある日、大智度論に諸法実相の解説として九事三如が語られてあるのを見てドキッとした。一年許り前のことである。九事と九如是が似ていることよりも、九事に前中後なき由と、下中上の三如がなんとなく本末究竟等に似ていたからだった。闇で何かがピカリとした感じがした。その時は、その頁へ若干のメモをしただけだったが、この七月、どうした弾みか、九事三如と十如是との共通点を考えたくなり、まとめたら「十如是考」になった。

十如是を十如と称すること自体理解し難いのだが、それをしも実相と呼び馴らしてあることは、どう考えても経の文脈に乗らないので卒直にメモし、直仰へ印刷したが、半信半疑のものを読者全員へ配るわけにゆかず、一部の人へだけ届けて批判を請うた。

それまでは止観と玄義しか見ていないので、「文句はきつと十如実相を否定してるだろう——」と期待したが、八月、日本から届けられた文句のコピイは十如実相の筋を弁証していた。或は、天台の遺弟の意案かもしれないと思ひ、続いて「根性の融・不融」「十如是は実相か諸法か」「円頓章と十如是」などをまとめたが、十如是諸法との信念は半信半疑から一挙に九信一疑くらいに高

騰成長した。

ところが十月中旬、やっと入手できた文句廿巻は、全篇に亘り十如実相の色がにじんでいる許りか、その偉容、並に「解題」「解説」に圧倒され、九信一疑は一信九疑に凋落した。無理からぬことで、十如実相はすでに千三百年来、中・朝・日三国の無数の学匠に伝承琢磨されてきている。仮に、それが異解誤釈であつたとして、今、天台大師が章安・妙楽を左右に従えて再来し、訂正を叫ばれたとて、もはや、どうにもならぬほど三国の仏教界の基盤に定着している——。況んや、誤りかも知れぬというのは私だけではないか！私は墜落しながらそんなことをも考えた——。

然し、今、その墜落がきわどい所で降り、そこから下へはどうしても落ちない。見ると大坑の口は岩盤で塞がっている。私の裸足は岩肌にあたしかに触れて実感している。私はその岩盤を教相事実と呼ぶことにした。祖師は名字の凡夫の拠所は教相の一字一句にありと云われた。私は今、疑念と信念の乱雲交錯の下に起ちつくしているのだが、口には出さないけれど十如是に關しこうした体験を持つお方は門下に多いと思う。卒直なる意見交換を望みます。(八五・一〇・廿三)

『瑜伽論』菩薩地における菩薩行

清水海隆

中期大乘仏教における菩薩思想の主要な資料である『瑜伽論』菩薩地が、十三住と七地という対応関係にある二種にまとめられる多種の階位を設定している事を既に確認した。本発表では菩薩思想研究の第二段階として、菩薩地において如何なる行が設定されているかを検討・整理するものである。

さて、菩薩地では三種の菩薩行説示がされている。即ち、第一には初持瑜伽処十八品中の自他利品以下十六品の総摂を菩薩行とし、それを自他利品・菩提品の所學処・力種姓品の如是學・施品・菩薩功德品の能修學に三分している。第二には第二持隨法瑜伽処の住品所説の十三住が菩薩行を摂するとする。第三には第三持究竟瑜伽処の行品において波羅蜜多行(十波羅蜜)・菩提分法行(三七菩提分法・四尋思・四如實智)・神通行(六神通)・成熟有情行(二無量・成熟有情)を四菩薩行とす